

会社の危機で

自己破産して逃げる社長 M&Aしてでも会社を 残す社長

残す社長

「どうも最近、ウチの社長の様子、おかしくないか」
「大丈夫だよ、あの人は」
「そう言いきれる自信はあるだろうか？」
「いまの時代、明日、何が起きてもおかしくない。会社が傾いたとき、経営者の才覚だけで従業員の運命も大きく変わる。逃げる社長を見分けて賢く手を打ち、悲劇に巻き込まれないように注意したいものだ。」
中小企業の経営に詳しく、みずからM&Aを決意して事業存続に成功した鈴木均氏にうかがった。



自らが傾いたときに、社長の腹のくくり方や往生際のよし悪しで、勤めている人間の先行きがずいぶんと変わる。社長の性格・あり方は単純化はできないものの、これまでの経験から「危ない社長」の傾向を抽出しよう。

逃げだす社長六パターン



▽▽▽ 優柔不断な社長

中小企業でもイザとなればM&Aで事業を売却するなどして、時代に合った継続の道が選べる。だが、他人の連帯保証を多数引き受けているような社長の率いる会社だと、買い手も腰が引けてしまう。買

いたくても買えない。優柔不断な社長は、ついつい簡単に連帯保証人を引き受けてしまう。言いたいことも言えない。

これではイザというときに、会社を救うことができない可能性が大きい。経営者というのは「決断業」である。決断力のなさは、結局、チャンス逃してしまふことにつながる。



▽▽▽ 公私混同な社長

ゴルフをするのもすべて会社の経費。海外旅行も、奥さんのブランド品も、すべて会社がらみで処理しようとする経営者がいる。

いわゆる浪費癖である。最悪なのは、社員に「いまわが社は創業以来の困難に直面して

いる。がんばってくれ」などと言いながら、ゴルフへ行っているような社長である。

公私混同がはなはだしいと、自分のやるべき仕事もよくわからなくなってくる。イザというときに逃げだすタイプだ。



▽▽▽ 他力本願な社長

「いまわが社が苦しいのは、ライバルのA社が汚い手を使っているからだ」とか「景気が悪いので苦しいだけだ」といったように、理由を外に求めるタイプも要注意だ。

これは自信のなさの現われだ。自信のある経営者は、ちょっとしたことにも逃げずに最後まで対応しようとするだろう。自信のない経営者は何でも人のせいにし、イザというときには逃げてしまう。



▽▽▽ 臆病な社長

慎重さと臆病は微妙に違う。挑戦はしても、石橋を叩いて渡るタイプは慎重。挑戦そのものを避けるのは臆病である。臆病な経営者がすべて悪いわけではない。バブル時代に、おかしなチャレンジをしなかったおかげで生きのびた企業も少なくない。

だがいまは、起業家精神の豊かな経営者でなくてはチャンスもない。いろいろ挑戦して多角化を図り、ダメなものはやめ、いいもの

自己破産して逃げる社長 M&Aしてでも会社を残す社長

を伸ばす。臆病で、新規事業に手を出せないようでは、とても勤まらない。



▽▽▽ 独りよがりな社長

いわゆる、裸の王様だ。お山の大将、見栄っ張りな社長である。これ

はとても危ない。そもそもこのような経営者の多くは、社員の人生、社員の家族を含めた大勢の人生そのものを預かっている、という意識に欠けている。

朝令暮改でもいいのだが、そこに戦略がなければ単なる独りよがりである。自分の戦略をまず明確にし、社員に打ちだして徹底する。戦略にのっとった朝令暮改はいくらやってもかまわない。

思いつきで手を出してみる、人から聞いては試してみる。これは戦略ではないし、失敗しても無責任に逃げてしまう。

戦略を明確にしたがらない経営者も多いが、この厳しい時代こそ、はっきりした道筋を社内を示すことがトップの役割である。



▽▽▽ 公正さに欠ける社長

規模が小さいとはいえ、社員がいて、得意先が複数あるようなビジネスを展開している会社なら、決算書を社内

公開すべきだろう。いま会社がどのような状況にあるのか、きちんと示さない経営者は危

ない。

また、どうすれば昇給したり昇格するのか、よくわからない会社もまずい。おそらく就業規則も形だけのもので、社長がそのときの気分ですらやっていると。社長が「憲法」になってしまっている。このような経営をしている会社に限って、朝礼では精神論である。経営者に対する牽制システムがまったくないのはまずい。社長の交際費を含めて、誰がどうチェックするのか、公正に対処できているかを見極めたい。

以上のように、自己管理のできない社長は危ないのである。なお、規模が小さいにもかかわらず、代表取締役が二人いる会社も要注意だ。そんな会社は役員報酬を知られたくないため決算書を公開しない。この二人はたがい親族で、役員報酬をうまくやりくりして生活費に余裕をもたせている。

会社を残す社長とは？

一方、逃げない社長はどういう人たちか。何か事が起きたときに、打つべき手をすぐ打つ。社員にもよくわかるように考えや戦略を打ち出す社長である。生き残り方を知っている社長は、迷わずに正しいタイミングで手を打つ。

そもそも中小企業の経営は、割に合わないことが多い。労多くして益が少ないのがあたり前である。それが、もし割に合う社長がいたとしたら、経営がおかしくなったら真っ先に逃げるだろう。

割に合わないことを承知のうえで、戦略を立て、会社の維持・発展にまい進している社長こそ逃げない社長なのである。

経営者の資質で、業績に差が出る時代になっている。私の場合も、創業者である父は会社を発展させたが、二代目の私はM&A手法を使って、優れた経営者のいるリーディングカンパニーに経営権を譲渡した。社員も会社もそっくり引き継いでもらった。そこで得た資金で、私は新たにまったく別分野の会社を起した。M&Aを活用すれば、多くの中小企業、同族経営の企業に、こうしたチャンスが生まれる。

ただし、第三者の評価を受ける以上、厳しくても経営を正しく行なっていないと聞かれる。当然、経営者の基本的な資質が問われることになるのだ。

すずき ひとし

株式会社メルサ代表取締役社長。三浦大学経営学部卒業後、総合旅行株式会社勤務。エス・イー・イー・ワールドグループを起業するとともに父親の創業した米沢リネンサプライ株式会社を継ぐ。M&Aにより売却。02年、株式会社メルサを設立。教育事業、コンサルティングなどを展開している。著書に「私が会社を売った理由(わけ)」など。